

耳鼻咽喉科学講座 教授就任のご挨拶

耳鼻咽喉科学講座 教授 さかもと たつゆり
坂本 達則



2020年5月1日付で耳鼻咽喉科学講座の教授に就任いたしました。

私は、1995年に京都大学を卒業し、神戸市立中央市民病院、京都大学医学部附属病院、田附興風会医学研究所北野病院で耳鼻咽喉科診療の研鑽を積み、特に最近では経鼻内視鏡手術と耳科手術を中心に診療を行って参りました。当科では首から上の脳と目以外の多くの臓器を扱っていますが、特に耳や鼻は感覚器としてQOLに深く関わっています。経鼻内視鏡手術は技術的な進歩が著しく、慢性副鼻腔炎に対する手術や鼻中隔彎曲症等の鼻腔形態の問題に対する手術だけではなく、鼻副鼻腔や頭蓋底の腫瘍などに対しても低侵襲かつ確実な手術ができるようになってきています。また、耳科領域でも慢性中耳炎に対する鼓室形成

術や高度感音難聴に対する人工内耳手術などによる患者さんの生活の質の向上だけでなく、内視鏡手術の導入による低侵襲化も進んできております。これからは、このような低侵襲で精細な感覚器医療を島根県においても提供していきたいと思っております。

また、現在の当科はこぢんまりとした所帯ではありますが、耳鼻咽喉科医の教育体制を整えて、多くの若手になかまになってもらいたいと考えています。

新型コロナウイルス感染症の蔓延による緊急事態宣言のさなかに島根県に参りました。耳鼻咽喉科診療においても、鼻や咽頭は感染リスクが高いとの情報もあり、外来や手術の抑制等でご迷惑をおかけしております。早期に正常化し、新しい診療体制を整えたいと思っております。

皆様のご支援・ご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

島根大学医学部における研修会・講演会・セミナー開催情報

7月15日～8月14日

対象者： 一般 一般市民 医療 医療関係者 本学 本学教職員・学生

開催日	開催名	場所(★印 学外開催)	対象者	主催者
7/25 8/23 の土・日曜日 全4回 10:00～12:00	第2回CLIMB®プログラム がんの親をもつ子どもへのサポートグループ	島根大学医学部附属病院	がんの診断を受けたお父さま、お母さまを持つ6～12歳頃のお子さま	島根大学医学部附属病院
8/8(土) 17:45～19:00	第26回出雲リハビリテーション研修会 「関節リウマチ治療の進歩ーリハビリテーション治療の役割ー」	★ニューウェルシティー出雲	医療	出雲リハビリテーション研修会

詳細については、医学部・附属病院ホームページ【研修会・講演会・セミナー】をご覧ください。

Vol.81 07
2020
島根大学医学部
島根大学医学部

2020年7月発行
編集・発行 島根大学医学部附属病院「病院ニュース」編集委員会
問合せ先 島根大学医学部附属病院 医療サービス課 医療支援(地域医療)担当
TEL: 0853-20-2068 FAX: 0853-20-2063
◆島根大学医学部附属病院 ホームページ <http://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/>



Shimane University Hospital
島大病院ニュース

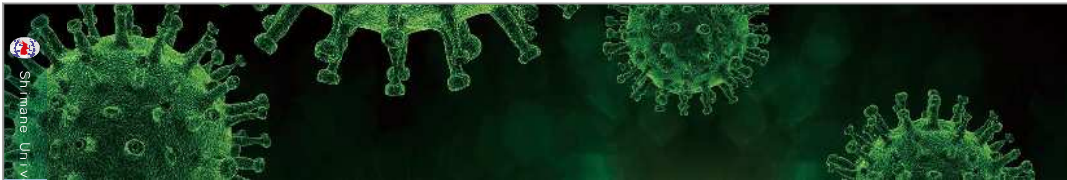
2020年
7月
Vol.81

NEWS



CONTENTS

- ・島根大学病院の新型コロナウイルス感染対策について(6月～7月)
- ・先端がん治療センター長就任のご挨拶
- ・耳鼻咽喉科学講座 教授就任のご挨拶



島根大学病院の 新型コロナウイルス感染対策について

6月～7月

病院長 いがわ みきお
井川 幹夫

県内では、5月3日以降、6月末まで新たな感染例は発生せず、6月19日から全ての都道府県への移動の自粛要請が全面解除されたことを受けて、同日付で県外から当院への受診、早帰り出産も受け入れています。また、病棟の面会制限についても、6月19日から個室のみ解除としています。4人部屋ではこれまで通り面会制限を継続していますが、これは入院患者さんのアンケート調査で、面会制限により静かな療養環境が保たれているとの声が多く、さらに病棟へのWi-Fi設置によりオンライン面会が可能となっている点を考慮したものです。医学科と看護学科の病院実習では、7月6日から当院の病院ゾーンへの学生の立ち入りを認め、外部の医療従事者養成機関からの実習は7月13日以降に受け入れます。

PCR検査については、新たに核酸・タンパク質精製装置、PCR測定装置を導入して、週60件の検査が可能です。臨床検査技師の増員、検査機器を追加導入して実施件数を増やす予定です。これまで耳鼻咽喉科、歯科口腔外科、脳神経外科(下垂体腫瘍)などの術前にスクリーニング検査としてPCRを実施していますが、全身麻酔で気管挿管を行う症例にも拡大しつつあります。PCRの採取検体については、症状発症から9日以内であれば唾液検体と鼻咽頭ぬぐい液間に良好な一致率が認められ、唾液採取には検体採取に係る感染防御や人材の確保の負担が軽減されるなど利点が多いことから、当院でもPCR検査は唾液採取を標準とし、今後感染者の入院を受け入れた場合、ケアにあたった職員に対する定期的な検査、実習生の希望者にもPCRを実施します。また、県内の医療機関からのPCR検査を当院が受託し、検査結果を迅速にお知らせする準備を行っています。

6月号でも述べましたが、日本病院会、全日本病院協会、日本医療法人協会の3団体の本年4月の速報値によると、新型コロナウイルス感染症患者を受け入れた病院では、外来患者、入院患者ともに減少し、医業収入、医業利益率ともに悪化がみられています。厚労省のHPによると、6月2日までに全国の重症者のうち81%を大学病院が受け入れており、国立大学病院長会議による集計では、4月の収益減が都市部の国立大学病院で顕著であり、5月には収益減が地方の国立大学病院まで及んでいます。当院では、4月分の収益には大きな影響は認められませんが、5月には収益減に至っています。6月以降、感染リスクを最小化しつつ、本来の大学病院としての診療を取り戻し、第二次補正予算からの交付金を活用して、第2波に備えた体制強化を図ります。

地域の医療機関の皆様には、今後ともご支援・ご協力の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

先端がん治療センター長就任のご挨拶

先端がん治療センター センター長 教授 たむら けんじ
田村 研治

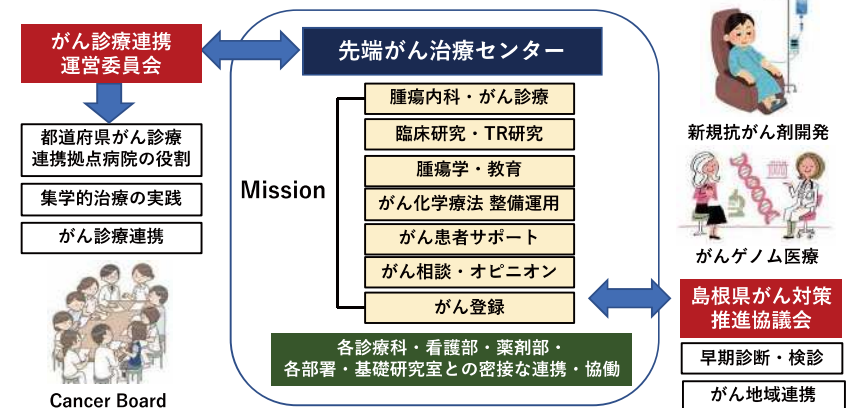


2020年6月1日付で島根大学医学部附属病院先端がん治療センター長を拝命いたしました。先端がん治療センターは、前鈴木淳司センター長のもと、がん患者さんを対象に最新の医療を提供し、がん治療からサポートケアまで包括的ながん医療を推進する目的で設置されました。

現在のがん治療においては、ロボット手術や、高精度放射線治療など急速な技術の進歩がみられます。患者ごとの腫瘍における遺伝子の情報をもとに抗がん剤を選択する「がんゲノム医療」についても保険医療が可能になりました。また、特定の遺伝子異常をもとにがん種横断的に適応を有する抗がん剤が増えてきており、高頻度マイクロサテライト不安定性(MSI-High)を有する固形癌に対するペンプロリズマブなどその例です。

これらの新しい技術から得られる恩恵をがん患者さんに適正に提供するには、各診療科や医療スタッフの職種を超えた情報共有と協力が必要となります。各症例の治療方針を診療科の垣根を越えて議論するCancer Boardは集学的治療の実践にきわめて重要です。

今後、高齢のがん患者は増加します。その治療方針は、体力、臓器機能、合併症、脆弱性(フレイル)によって大きく変わります。最近は治療に対する患者の自己決定権についても重要視されています。島根県内のがん医療の推進のためには地域連携が不可欠です。新規抗がん剤開発のみならず、がん検診、がん登録、化学療法、がん相談、サポートケアなどにも貢献できるように努力したいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。





島大病院ニュース 2020年7月

ご報告



病院医学教育センター長就任のご挨拶

病院医学教育センター センター長 准教授 ながお たいし
長尾 大志



2020年6月16日付けで島根大学医学部附属病院 病院医学教育センター長に就任いたしました。島大病院ニュースをお読みの皆さま、ほとんどの方がはじめましてですので、自己紹介をさせていただきます。

私、長尾大志は1993年に京都大学を卒業し、一般病院での研修の後、京都大学大学院で学位を取得いたしました。その後カナダ・ブリティッシュコロンビア大学にて2年間研究を行なった後に、滋賀医科大学の呼吸器内科に着任いたしました。滋賀医大では少ないスタッフであったがゆえに教育に深く携わるようになり、教育にやりがい、面白さを感じるようになりました。最近では教育が業務の多くを占めるようになり、寝ても覚めても、はげさとしても、仕事を離れて映画を見ている、Youtubeを見ている、食事をしていても教育のことを考える、教育が趣味のような生活になってまいりました。しかし、呼吸器内科の1スタッフとして働いている以上、教育そのもの

や教育システムに関わるには限界がありました。

この度、病院医学教育センターのセンター長として教育をしっかり考える部署で働く機会を頂きました。微力ではございますが、出来る限り良い医学教育を島根の若人に提供して参りたいと考えております。どうか皆様のお力添えを頂けましたら幸いです。何卒よろしくお願ひ申し上げます。



島大病院ニュース 2020年7月

ご報告

再生医療センターの紹介

再生医療センター センター長 教授 うちお ゆうじ
内尾 祐司

再生医療とは、患者さんの体外で人工的に培養した幹細胞等を、患者さんの体内に移植等することで損傷した臓器や組織を再生し、失われた人体機能を回復させる医療です。

島根大学医学部では基礎研究だけでなく、整形外科では、治療が困難とされてきた関節軟骨損傷に対し、1996年からコラーゲンゲル包埋培養自家軟骨細胞移植を66例に実施し良好な治療成績を得てきました。また、小児科では、先天代謝異常症である骨形成が不良な低ホスファターゼ症に対して間葉系幹細胞と造血幹細胞の移植治療を世界で唯一実施しています。さらに、腫瘍生物学講座では、間葉系幹細胞を高純度で精製する方法を確立しています。

再生医療センターは、安全かつ適正に細胞治療・再生医療の臨床研究を実施するとともに、医学教育、人材育成ならびに高度医療に向けた研究支援を実施し、再生医療の発展への寄与・大学病院としての責務を達成することを設立の理念とし、2016年1月1日に開設されました。これまで自家軟骨細胞移植術による軟骨再生(図1)を25例に、低ホスファターゼ症に対する間葉系幹細胞による骨再生を3例に、造血幹細胞移植後の急性移植片対宿主病(GVHD)に対するヒト(同種)骨髄由来間葉系幹細胞移植を3例に行い、いずれも良好な成績を得ています。

本邦では、造血幹細胞移植、臓器移植と広範な重症熱傷に対するヒト(自己)表皮由来細胞シート、膝関節における外傷性軟骨欠損症又は離断性骨軟骨炎に対するヒト(自己)軟骨由来組織、重症心不全に対するヒト(自己)骨格筋由来細胞シート、造血幹細胞移植後の急性移植片対宿主病(GVHD)に対するヒト(同種)骨髄由来間葉系幹細胞などが保険承認されています。また、iPS細胞を用いた再生医療の臨床研究がすでに開始されています。再生医療はこれまで有効な治療法のなかった疾患・傷害に罹患された患者さんに大きな福音となることと期待されています。当センターでは、「医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律」および、「再生医療等の安全性の確保等に関する法律」を遵守し、厚生労働省に許可された臨床研究を遂行していくことより、地方においても世界の先進の医療を受けられるように今後とも努めて参ります。どうぞよろしくお願ひいたします。

図1 自家軟骨細胞移植術による軟骨再生(17歳、男子、サッカーで受傷)



再生医療センターメンバー

センター長: うちお ゆうじ 内尾 祐司(整形外科・教授)
副センター長: たけはら たけし 竹谷 健(小児科・教授)
まつざき ゆみ 細胞加工部門責任者: 松崎 有未(腫瘍生物学・教授)

ご報告

島大病院ニュース

2020年7月発行
編集・発行 島根大学医学部附属病院「病院ニュース」編集委員会
問合せ先 島根大学医学部附属病院 医療サービス課 医療支援(地域医療)担当
TEL: 0853-20-2068 FAX: 0853-20-2063
◆島根大学医学部附属病院 ホームページ <http://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/>



ご報告

島大病院ニュース

2020年7月発行
編集・発行 島根大学医学部附属病院「病院ニュース」編集委員会
問合せ先 島根大学医学部附属病院 医療サービス課 医療支援(地域医療)担当
TEL: 0853-20-2068 FAX: 0853-20-2063
◆島根大学医学部附属病院 ホームページ <http://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/>





島大病院ニュース 2020年7月

ご報告



「看護師の特定行為研修」がスタートしました

看護部 看護部長 たなか まなみ
田中 真美

当院では、2020年6月2日「看護師の特定行為研修」の開講式を行いました。

保健医療を取り巻く環境が変化するなか、2025年に向けてさらなる在宅医療等の推進を図り、医師又は歯科医師の判断を待たずに手順書による一定の診療の補助を行うことを目的に2015年10月に「特定行為に係る看護師の研修制度」が開始されました。当院では、看護師の特定行為研修機関としての準備を行ってきました。2020年2月26日厚生労働省からの指定研修機関としての指定を受け、この6月2日に開講式を執り行いました。

当院の特定行為研修は、「創傷管理関連」「栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連」「血糖コントロールに係る薬剤投与関連」「循環動態に係る薬剤投与関連」の4区分です。今回、3名の応募があり「栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連」2名、「循環動態に係る薬剤投与関連」1名が受講していくことになりました。

開講式では、井川病院長より「早期介入により重症化を予防し安全な医療提供を実践していくことが必要。そのためには、看護師の判断力は欠かせない。専門性を発揮し医学的視点と看護の視点両面から判断を行い、躊躇せず発言し自律性を高めて欲しい。」と特定行為の行える看護師としての期待を述べられ、その後、3名の受講者がそれぞれ抱負を述べ決意を新たにしました。

当院では、特定行為を実施できる看護師の育成により、安全で安心な医療を実践し、急性期医療から地域における在宅医療を支え、患者さん・ご家族が在宅での療養を安心して継続できるようにさらなるチーム医療の推進を図り、質の高い医療を提供する人材を育成していきたいと考えています。



島大病院ニュース 2020年7月

ご報告



無線LANの導入により入院患者さんの「オンライン面会」が可能になりました

患者満足度向上WG

当院においても、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、4月上旬から入院患者さんに対する面会を制限しており、患者さんやご家族にはたいへんご不便をおかけしております。

ご家族との面会がかなわず、寂しい思いをしていらっしゃる患者さんの声を伺うたびに、当院としてもたいへん心苦しい思いを抱えておりました。

そこで、病院内で検討し、入院患者さんにスマートフォンのビデオ通話など、ご家族と「オンライン面会」をしていただけるように、各病棟の食堂及び談話室に無線LAN(Wi-Fi)設備を導入しました。スマートフォン等をお持ちでない患者さんには院内のタブレットをご利用いただけるようにご案内もしています。

5月15日から利用開始し、さっそく多くの入院患者さんにご利用いただいています。お近くにお住まいのご家族はもとより、ふだんはなかなか会えない遠方のご家族のお顔が見られたと、たいへん喜んでいただきました。

緊急事態宣言が解除されても、新型コロナウイルスの完全な収束は見られず、残念ながら今はまだ安心して面会いただけるような状況になっておりません。

そのようななかで、ひとときでも患者さんの笑顔が見られることが、職員の励みにもなっています。



ご報告
島大病院ニュース

2020年7月発行
編集・発行 島根大学医学部附属病院「病院ニュース」編集委員会
問合せ先 島根大学医学部附属病院 医療サービス課 医療支援(地域医療)担当
TEL: 0853-20-2068 FAX: 0853-20-2063
◆島根大学医学部附属病院 ホームページ <http://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/>



ご報告
島大病院ニュース

2020年7月発行
編集・発行 島根大学医学部附属病院「病院ニュース」編集委員会
問合せ先 島根大学医学部附属病院 医療サービス課 医療支援(地域医療)担当
TEL: 0853-20-2068 FAX: 0853-20-2063
◆島根大学医学部附属病院 ホームページ <http://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/>





島大病院ニュース 2020年7月

ご報告



2020年度 病院医学教育研究助成の採択状況について

病院医学教育センター

当院の病院医学教育研究助成は全国の国立大学では珍しい病院職員に対する研究助成です。

病院では各部署、部門においてさまざまな業務が日常的に行われています。それを研究対象に医師以外の職種が研究することを奨励しており、そのような研究に助成をしています。医学研究は、とくが医師が中心になりがちですが、当院ではたくさんの医療スタッフが研究申請することからも当院の医療従事者の資質の高さを感じ取ることができます。

さて、先日、2020年度病院医学教育研究助成の選考が行われました。下表にありますように、今年度は研究6件(15件中、採択率40%、助成額計2,326千円)、研修58件(91件中、採択率64%、助成額10,005千円)が採択されました。また、研修のうち、採択されなかった案件については、医療の質の向上と職員の活性化を促進するため、各部署からの申請件数に応じて部門別裁量経費として助成額1,000千円を配分し、助成額は総額で13,331千円を配分致しました。

さらに、もう一つの取組みとして、2019年度の優秀研究題目3題には、研究責任者に対し10,000ポイントのインセンティブポイントが付与されることが専門部会で決まりました。このような取組みにより、当院の病院医学教育の質がさらに向上することを願っています。

2020年度 病院医学教育研究助成採択一覧

研究課題	研究組織の名称	研究実施責任者
島根県下医療安全ネットワークの構築と質の向上に関する研究	医療安全管理部	遠藤 進一
e-learningを活用した研修実施後の学習効果測定の実施	医療安全管理部	森田 栄伸
医師の働き方改革が大学病院の医療安全向上に与える影響の分析	医療安全向上に影響を及ぼす因子の解明チーム	福田 誠司
新型コロナウイルス(COVID-19)検査試薬の検討	検査部	馬庭 恭平
まめネットを活用した病診薬連携システムの構築と双方向情報共有の向上のための基礎検討	薬剤部	北郷 真史
抗菌薬に関するモニタリングシステムの機能強化が適正使用へ与える影響	感染制御部	石原 慎之



島大病院ニュース 2020年7月

ご報告

新型コロナウイルス感染への対応 ～当院の手術前PCR検査の実施体制について～

感染制御部 部長 もりた えいしん
森田 栄伸

新型コロナウイルス感染者に手術を実施すると非感染者に比べて術後の状態が悪くなる場合があります。また、十分な防護をせずに手術を実施すると、術者や手術に関わる医療従事者に感染する危険性もあります。特に鼻腔や咽頭、口腔内などの手術では感染拡大のリスクが高いと考えられます。このため多くの大学病院で手術前あるいは入院前に新型コロナウイルス感染を除外するためのPCR検査が実施、あるいは実施の準備がなされています。

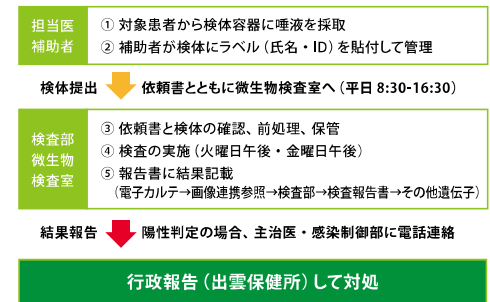
当院では、受診患者および全身麻酔で手術を受けられる予定の患者さんに対して、新型コロナウイルス感染を予知する問診を行っていますが、無症状の感染者では問診のみでは感染を察知することができない場合もあります。このため、6月以降問診に加えて新型コロナウイルス感染を除外するためPCR検査を開始致しました。PCR検査は、耳鼻咽喉科、歯科口腔外科、脳神経外科(下垂体腫瘍手術)、眼科(経鼻手術)などの診療科の手術を対象にしています。6月2日以降、検査検体として唾液が承認されましたので、それ以降当院の検査では唾液での検査としています。当院のPCR検査については、迅速測定用機器の導入(図1)や検査部人員の増員など体制は徐々に整備されておりますので、今後検査対象や件数も拡大できる予定です。実施に際しては、検査部を始め関係する部署で十分に議論を行い、的確に実施できるよう配慮しています(図2)。

図1 院内PCR検査の機器



左：納入済みの核酸タンパク質細胞精製システム(サーモフィッシャー社)
右：納入予定の自動遺伝子解析装置(ベックマン社)

図2 術前院内PCR検査の実施フロー図



2020年7月発行
編集・発行 島根大学医学部附属病院「病院ニュース」編集委員会
問合せ先 島根大学医学部附属病院 医療サービス課 医療支援(地域医療)担当
TEL: 0853-20-2068 FAX: 0853-20-2063
◆島根大学医学部附属病院 ホームページ <http://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/>



2020年7月発行
編集・発行 島根大学医学部附属病院「病院ニュース」編集委員会
問合せ先 島根大学医学部附属病院 医療サービス課 医療支援(地域医療)担当
TEL: 0853-20-2068 FAX: 0853-20-2063
◆島根大学医学部附属病院 ホームページ <http://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/>





島大病院ニュース 2020年7月

ご報告



就業規則(職員給与規程等)に 「新型コロナウイルス診療等従事手当」新設!!

総務課人事係

当院は、「重症管理指定医療機関」に指定されており、新型コロナウイルス感染症患者、特に重症患者の受け入れにあたりその役割を担っています。

診療等にあたっては、医療の最前線にいる医師、看護師、メディカルスタッフにとっては、自身が感染する危険を伴い、精神的緊張度の高い業務に従事することにより心身の疲弊も高まることから、特殊勤務手当に「新型コロナウイルス診療等従事手当」を新設しました。

手当の支給につきましては、医学部および医学部附属病院に勤務する職員が、新型コロナウイルス感染症患者(感染の疑いがある者を含む。)に対し、防護衣等を着用し診療、看護、検査等に従事した場合、1日5時間以内の業務の場合、1日につき5,000円を支給することとしました。なお、業務上やむを得ず5時間を超えて従事する場合には1日につき10,000円を支給します。

当院では、職員が安全に、そして不安なく職務に専念できるよう、就業環境の充実を図り、質の高い人材の確保を行うことで、より良い医療サービスの提供を目指していきます。



島大病院ニュース 2020年7月

ご報告



『あなたの「おうち時間」の過ごし方アイデア募集』 たくさんの応募がありました

ワークライフバランス支援室 室長 田中 真美

当院は、すべての職員が「仕事と家庭の調和」を実現できる職場づくりを目指して活動しています。

今年度、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策として、外出の自粛や在宅勤務等が推奨され、私達の日常生活は大きく変化しました。感染症終息の見通しがもてない不安やストレスを抱え生活している状況を鑑み、ワークライフバランス活動の一貫として出雲キャンパスの職員に休暇(休業)中における自宅等での過ごし方のアイデアを募集したところ、多職種の方々から多くの応募がありました。

家族と過ごす写真、料理の腕をあげた作品、野菜づくり、部屋の片付け等、いつもと違う日常の様子が伺え、心温まる作品が揃いました。ご応募いただいたアイデアについては、今後、院内のワークライフバランス支援室掲示板及びホームページに掲載することとしました。少しでも職員の心にゆとりがもて癒しに繋がればと思っています。

<応募作品>一部紹介

県外の友達とZOOM飲み会

お菓子作りに挑戦中です

「草取り」無心になります。その後のビールがおいしいです。

孫からたくさんの手紙がきます。私の宝物。返事もたくさん書きました。

かぎ針編みにコースターを作りました。好きな映画を見て過ごしています。

日光浴で子どもの体力消耗、母は、体内リズムを整える。

断捨離、いらないもの、いるものにかけて片付けをコツコツしています。

夏に向けアクセサリ作っています。

自由に買い物に行くことができなかったので野菜位は自給してみようかとベランダ菜園始めました

今年はずじめて家庭菜園始めました。じゃがいも植えました。



2020年7月発行
編集・発行 島根大学医学部附属病院「病院ニュース」編集委員会
問合せ先 島根大学医学部附属病院 医療サービス課 医療支援(地域医療)担当
TEL: 0853-20-2068 FAX: 0853-20-2063
◆島根大学医学部附属病院 ホームページ <http://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/>



2020年7月発行
編集・発行 島根大学医学部附属病院「病院ニュース」編集委員会
問合せ先 島根大学医学部附属病院 医療サービス課 医療支援(地域医療)担当
TEL: 0853-20-2068 FAX: 0853-20-2063
◆島根大学医学部附属病院 ホームページ <http://www.med.shimane-u.ac.jp/hospital/>





ご報告



ご報告

新たな診療体制とアフェリシス療法のご紹介

血液浄化治療部 部長 准教授 伊藤 孝史
いとう たかふみ

当院の血液浄化治療部は、腎移植の周術期管理を目的として1987年に2床で開設されました。その後、血液透析導入症例や入院加療を要する透析症例の増加に伴い、現在では10床で管理・運営しています。2019年度からは従来の泌尿器科と腎臓内科の共同診療体制から、泌尿器科のサポートを得ながら腎臓内科中心の診療体制に変更いたしました。2020年度からはシャント手術やシャントPTAに関連した透析医療全般の管理・運営を腎臓内科主導で行っています。併せて腎移植症例の術前、術後管理にも積極的に介入し島根県の腎代替療法のメッカとなるべく泌尿器科とともに日々研鑽しております。

さて、血液浄化治療部の業務ですが、血液透析(図1)はもちろん、アフェリシス療法(図2)にも積極的に力を入れております。血液透析に関しては、原則、外来維持透析ではなく、透析導入時と当院入院時の維持透析を主たる業務としている事は従来とおります。

島根大学病院血液浄化治療部は、2015年に山陰地方で初めての日本アフェリシス学会認定施設として正式に登録されました(図3)。血液型不適合腎移植に対する血漿交換や二重濾過血漿交換、難治性ネフローゼ症候群・コレステロール結晶塞栓症(先進医療Bとして実施)に対するLDLアフェリシス療法、潰瘍性大腸炎に対する顆粒球除去療法(GCAP)、腹水濾過濃縮療法のほか、血液疾患(血栓性血小板減少性紫斑病など)、神経疾患(重症筋無力症、ギランバレー症候群など)、皮膚疾患(水疱性類天疱瘡など)の原因物質の除去目的でもアフェリシス療法を実施しております。免疫抑制薬や生物学的製剤の進歩に伴い、アフェリシス療法が活躍する場合は若干減少傾向ではありますが、依然としてアフェリシス療法を必要とする難治性疾患・病態が存在するのは事実です。山陰地方唯一の学会認定施設として、これからも山陰地方の血液浄化療法の最後の砦として、各診療科の診療を支えて参りたいと考えております。対象となる症例がございましたら、是非とも島根大学病院血液浄化治療部までご紹介いただきませうようお願い申し上げます。

図1 透析治療件数

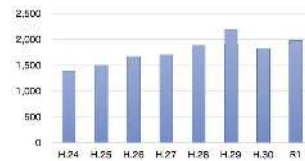


図2 アフェリシス件数

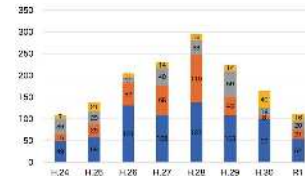


図3 一般社団法人日本アフェリシス学会認定施設認定証



子どものこころ診療部 ～連携の重要性について～

子どものこころ診療部 部長 講師 林田 麻衣子
公認心理師 伊藤 晃崇

島根大学医学部附属病院子どものこころ診療部は、精神科医、小児科医、公認心理師が協働し治療にあたっています。

日本では、2017年度に自殺した児童生徒数は250人に至り、1986年度以降最多となりました。子どもの置かれた状況は厳しく心の問題は学校と密接に関わっています。子どもの心の問題による医療機関への受診希望者は全国的に増加しておりますが、当院でも診療部開設以降、外来患者数は増え続けています。

近年、発達障害への関心が高まり、小中学校の通常学級に在籍する学習面または行動面で著しい困難を示す児童生徒は文部科学省の調査では全体の6.5%を占め、発達障害のある児童が多数含まれていると考えられています。また少子化が進む中で通級指導、特別支援学校・支援学級の児童生徒数が年々増加し発達障害支援ニーズが高まっています。その一方、落ち着きがないから薬を出してもらおうように学校から言われたと、子どもだけでなくご家族もよく理解できないまま医療受診に至る例もあります。学校の先生は例外なくご多忙でいらっしや、どのような医教連携を行えばよいのかと思索の日々です。

子どもは大人以上に環境の影響を受けやすく、発達障害のみならず、子どもの心の診療を行っていく上で本人や周囲状況について適切に評価を行うことが肝要です。多動、不注意、衝動性のある子どもに詳細な評価を行わずに薬を出すことは、精神症状を呈す子どもの様々な要因を子ども個人の問題、さらには脳機能にのみ還元してしまう危険性をはらんでいます。アメリカではすでに多動、不注意、衝動性に対して評価が不十分なまま薬剤処方が行われる例が後を絶たず、甚大な社会問題となっています。薬剤は治療の上でわずかな部分に過ぎないことを念頭に置き、子どもにとっての二大拠点～家庭と学校～の適切な環境調整、支援を行うことで相乗的に良い方向に推し進めることが可能になると思われます。

当院では少しでも早く適切な環境調整、支援が入ることを目指し、医療介入前に国、島根県と協働で詳細な事前アセスメントを実施する試みを開始しています。新型コロナウイルス感染症への対応を行いつつ、教育、福祉、行政のエキスパートの皆様と力をあわせることができればと思っています。何卒よろしくお願いたします。

